

# 観貨邏僧弥陀山と百万塔

蓮池利隆

はじめに

観貨邏僧弥陀山

タジキスタン出土の仏塔模型

冥土の神ミトラ

カレ=コファルニホン遺跡調査

ま と め

## はじめに

初期阿弥陀信仰成立の要因として、クシャーン朝下における仏教と異文化の交渉を挙げることができる。そのような交渉の中で成立したと考えられる古訳経典には、「阿弥陀」と「弥陀」が併用されており、それはサンスクリット文献が定義するアミターユス・アミターブハ、すなわち無量寿・無量光とは異なる意義をもっていた<sup>(1)</sup>。事実、古訳経典には阿弥陀仏が入滅すること、あるいはその光明が無限ではなく、具体的数量で示されることが説かれている。これらのことから、筆者は「弥陀」が「阿弥陀」に先立つ原語形であり、ソグド語などの中期イラン語に特有の母音挿入によって二次的に「阿弥陀」が成立した可能性を指摘してきた<sup>(2)</sup>。この場合、a-「阿」は、発音の便宜のためだけに挿入された母音であって、意味上何らの影響を与えるものではない<sup>(3)</sup>。このような母音挿入は、中世ペルシア語辞書の見出し語においても確認することができる<sup>(4)</sup>。

また、この現象を踏まえた上で、Mitraの第二音節 tra が転訛して da になったと仮定すれば、「弥陀」の語源はゾロアスター教で広く信仰されたミ

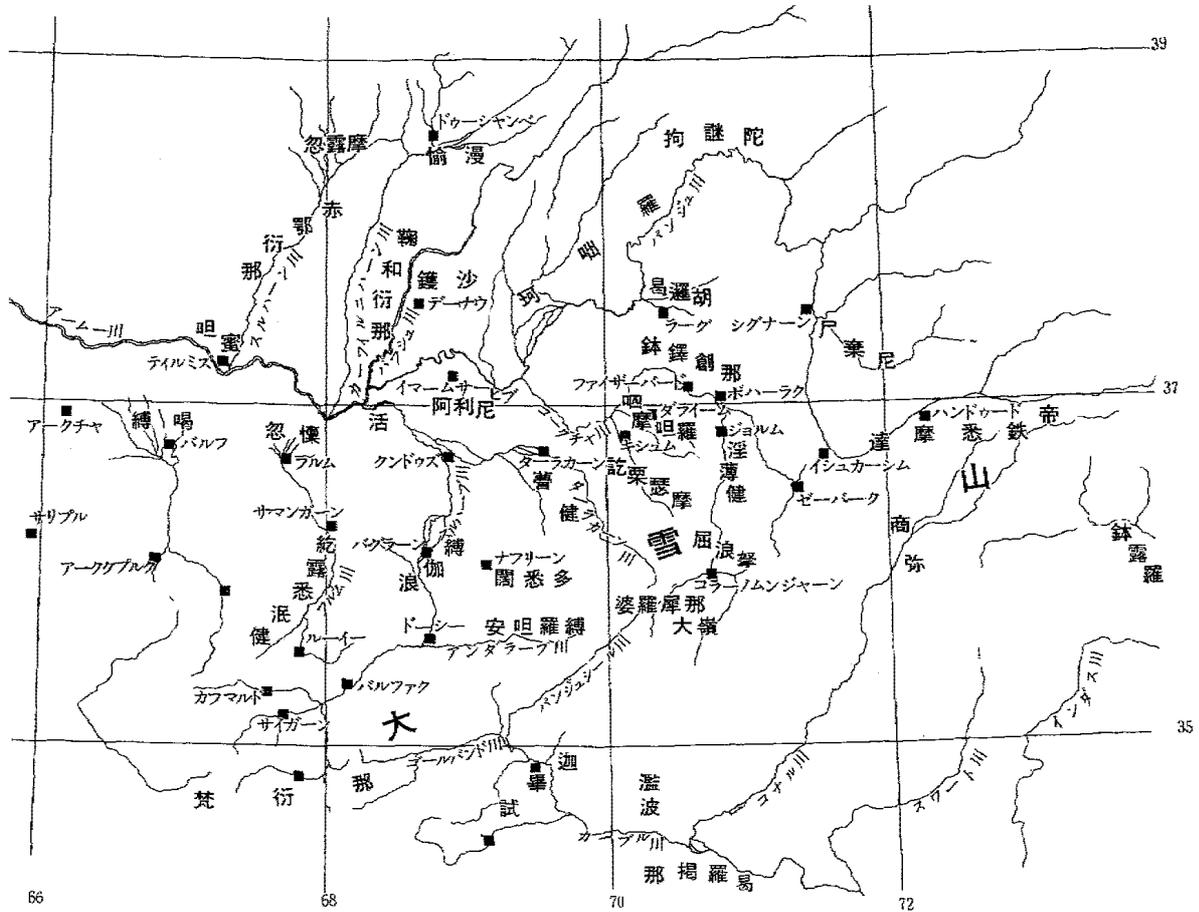
トラ（ミヒル，ミスラ）神であったと推定することが可能となる。この仮説を<sup>(5)</sup>検証するため、筆者はタジキスタンにおける調査を続けている。その中で明らかとなるのは、今なお民間習俗の中に残るゾロアスター教の影響であり、ミトラを始めとする神々の存在である。例えば、新年の行事の一つに野外で焚き火を熾し、その上を飛び越えるという儀式がある。また、仏具の柄香炉に似た器具に香草を焚き、その薫香を衣服などに焚き染め、除災招福を願う風習も見られる。さらには、イスラーム霊廟においてさえも、火を献ずる三つの炉が併設され、ミトラ神の使いである山羊の角や頭骨がうずたかく奉納されている例がある。いずれも火を崇拜するゾロアスター教の特徴、および太陽神とも見なされるミトラ神への信仰によっている。

これらの習俗から明らかになるのは、イスラーム化後も維持されてきたゾロアスター教を基盤とする独自の信仰である。このような現象はイスラーム化前、紀元7～8世紀より前の中央アジアにおいてはより顕著であったと考えられる。紀元2～3世紀頃、クシャーン朝の版図であった中央アジア地域において、仏教はそれらの習俗と深く関わっていた。そのような状況は、クシャーン朝の中心であったガンダーラ地域において展開した仏教とゾロアスター教の交渉をも証明するものである。

## 観貨邏僧弥陀山

「阿弥陀」よりも「弥陀」が先行する原語であり、それがミトラの音訳であるという仮説を立証するためには、その用例を挙げる必要がある。CBET<sup>(6)</sup>電子大蔵経によって「弥陀」を含む語句を検索すると弥陀山という人名が得られる。「弥陀は Mitra 神の音訳である」という仮説はこの観貨邏（トハラ Tokhara）出身の訳経僧の名前によって裏付けられる。観貨邏とは、アム河流域、現在のアフガニスタン北部からタジキスタン南部に広がる地域、あるいは民族名である。観貨邏族が紀元前2世紀にバクトリアを滅ぼして以来、この地域を観貨邏と呼び、中国では大夏と称した。紀元前1世紀には大月氏

に支配されたが、その後も存続した。下図はその観貨邏<sup>(7)</sup>の要図である。



玄奘『大唐西域記』第一卷には、

鉄門を出ると観貨邏國に至る。その地は南北千余里東西三千余里，東は葱嶺（パミール）に阨れ，西は波刺斯（ペルシア）に接する。南は大雪山（ヒマラヤ），北は鉄門に據る。縛芻大河（ヴァクシュ川）が中境を西流す。数百年より王族は嗣を絶ち，酋豪は力を競い各々に君長を擅ず。川に依り險に據りて，分かちて二十七ヶ国を為す。<sup>(8)</sup>

とあり，また，第十二卷には，同地域について十三ヶ国を挙げて「観貨邏國の故地」と記している。タジキスタンの歴史区分では，この前後（7～8世紀）の時期あるいはその地域をトハリスタンと呼んでいる。

経録などには，その観貨邏出身の訳経僧弥陀山について「唐では寂友（淑友）と言う」と記している。

沙門彌陀山。唐言寂友。観貨邏国人也。幼小出家遊諸印度遍学経論。於楞伽

俱舍最為精妙。志弘像法無悖鄉邦。杖錫而遊來臻皇闕。於天后代共實又難陀。訳大乘入楞伽經。後於天后末年共沙門法藏等。訳無垢淨光陀羅尼經一部。訳畢進内辞帝歸邦。天后厚遺任歸本國<sup>(9)</sup>。

天后とは則天武后（位690—705）のことであり、その治世に觀貨邏國の彌陀山が實又難陀と共に『大乘入楞伽經』を訳し、後に法藏等と共に『無垢淨光大陀羅尼經』を訳したことが記されている。經録が示すように、意識の寂友（淑友）に対応する音訳が彌陀山であるならば、訳經僧の名は Mitra-sānti となる。すなわち、寂・淑は sānti であり、友は mitra に対応する。寂友、淑友のいずれにおいても、友=mitra が彌陀で音写されていることは明らかである。この訳經僧の名前こそ、7世紀前後の中央アジア・西トルキスタン地域において、「彌陀」が mitra の音写であったことを示す証拠である。また、唐代におけるこの対応は、數世紀は遡るものの、初期淨土經典が成立した時期の音韻を考える上でも参考となるであろう。

### タジキスタン出土の仏塔模型

彌陀山が訳した『無垢淨光大陀羅尼經』の内容にも注目すべきものがある。この經典の大意は、以下の通りである。

釈尊がカピラヴァスツ城中の精舎に住しておられた時、城内に一人のバラモンがいた。彼はある占相師に余命がわずか七日であることを宣告され、大いに驚く。そこで、一切智者である釈尊のもとを訪ね、その宣告の真偽の程を確かめようとする。釈尊は余命が七日であること、さらには死後も惡道を経巡って多くの苦しみを受けるであろうことを告げる。バラモンは憂苦に沈み、釈尊の兩足に頂礼し、救済の方法を教示し賜うようにと懇願する。釈尊はカピラヴァスツ城中の三叉路に崩れかけた仏塔があること、その仏塔を修復し、相輪などの莊嚴を調べ、陀羅尼を書写して仏塔中に安置し、供養を執り行うようにと告げる。その功德によって、バラモンは命を永らえ、死後には極樂世界に生まれて百千劫もの間、安樂を享受し、次に妙喜世界に生まれて百千

劫もの間、安樂を享受し、さらに、兜率天宮に生まれて百千劫もの間、安樂を享受した。その間、バラモンは常に宿命を憶念し、全ての業障を除き、全ての悪道から離れ、常に諸仏によって摂護された。この因縁を説いた後、經典では、様々な形で息災延命のために仏塔を建立し、陀羅尼を唱えることを勧めている。例えば、

若有比丘比丘尼優婆塞優婆夷。若自造塔若教人造。若修故塔若作小塔。或以泥作或用甗石。……命若短促便得延寿。後臨終時得見九十九億百千那由他<sup>(10)</sup>仏。常為一切諸仏憶念。而與授記生極樂界。寿命九十九億百千那由他歲。

「若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷有りて、若しは自ら塔を造り若しは人をして造らしめ。若しは故塔を修し若しは小塔を作し。或いは泥をもって作し或いは甗石を用いん。……命の若く短きを促してすなわち寿延びるを得、後に臨終の時に九十九億百千那由他の仏を見ることを得て、常に一切諸仏の憶念を為し、極樂界に生ずるの授記を与えられ、寿命は九十九億百千那由他歳なり。」

ここには、出家者であれ在家者であれ、自らまたは人にすすめて仏塔模型を作成すれば、もし短い寿命の者であっても、寿命が延び、諸仏を觀じ、死後は極樂に生ずることが説かれている。

極樂に生ずることは、この部分以外にも、<sup>(11)</sup>  
令汝命根還復增長。久後寿終生極樂界。

「汝の命根還りて復た增長せしめ、久しくて後、寿終わりにて極樂界に生ず。」  
誦念此呪満足百年。是人命終生極樂界。

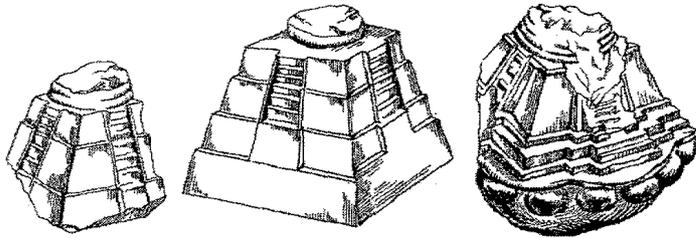
「此の呪を誦念して満足すること百年、是の人命終して極樂界に生ず。」  
聞塔鈴聲消諸一切惡業。捨身當生極樂世界。

「塔の鈴の声を聞くに、諸の一切惡業を消し、身を捨ててまさに極樂世界に生ずべし。」

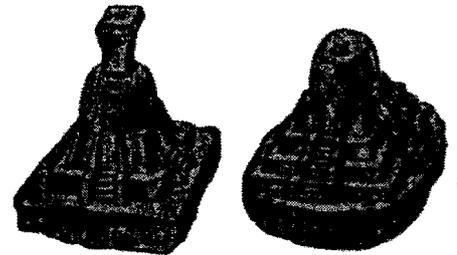
以上、合わせて4ヶ所で極樂が言及されている。

このような長寿と再生は当時の人々の素朴な願いに応えるものであった。中央アジア周辺やタジキスタンの仏教遺跡から出土する粘土製の仏塔（陀羅

尼塔) が作成された背景には、まさにこのような経典の存在があったものと考えられる。例えば、アジナ＝テパやヒシュト＝テパからも高さ5～10cmの粘土製仏塔模型が出土している。



アジナ＝テパ出土仏塔模型



ヒシュト＝テパ出土仏塔模型

また、アジナ＝テパ遺跡からは

「これらのダルマのために、かのタトハガタ スカの生地のために」

という銘文が印刻された粘土塊が仏塔の傍らで発見されたことの報告がある。<sup>(12)</sup> 「スカの生地」がどのような語形であるかについては検討の余地があるものの、「スカ」がサンスクリット *sukkha* 「楽」に対応するのはほぼ間違いのないであろう。したがって、「スカの生地」が「極楽」を表現したものである可能性も否定はできない。

リトヴィンスキーとゼイマリは多数の仏塔模型が仏教遺跡から出土することに関して、それらが奉納品であり、また巡礼者によって携帯され、その中にこめられた呪術的・守護的力によって現世的利益をもたらすものであると論じている。また、模型の意義については、世界樹の模型を再現するのと同時に、人間の身体が世界樹の象徴であり、マクロコスモスとミクロコスモスが感応道交すると解説している。<sup>(13)</sup> しかし、在家信者の中にそのような宗教的に深遠な意識があったとは考え難い。アジナ＝テパやヒシュト＝テパは僧院址であり、そこに居住していたのは主に出家者たちである。しかし、その僧院に多数の仏塔模型を奉納したのは在家信者であったと考えられよう。在家者信者たちの関心は現世的利益であったに違いない。弥陀山訳『無垢浄光大陀羅尼経』の説く内容から考えても、この世における長寿と来世における極楽往生を願うための奉納品であったと見るのが妥当なように思われる。

また、経典の本文中には、阿弥陀仏あるいは無量寿仏についての言及はないものの、陀羅尼の部分には阿彌多唵（アマターユ）の仏名が見られる。

南謨薄伽跋底阿彌多唵殺写恒他揭恒写<sup>(14)</sup>

(namo bhagavati amitayus̄ asya tathāgatasya)

また、経題中の「無垢浄光」には古訳『無量清浄平等覚経』所説の「無量清浄」との一致を認めることができる。これらのことから、7世紀末に漢訳された『無垢浄光大陀羅尼経』にはサンスクリットに由来するアマターユスの仏名が用いられるものの、経典の内容や経題にはその起源であった Mitra の特性が反映している。それはその当時に観貨邏国において行われていた習俗が影響を与えたものと考えられるのである。

## 冥土の神ミトラ

先の弥陀山訳『無垢浄光大陀羅尼経』には「久しくして後に寿終え極楽界に生ず」「是の人命終え極楽界に生ず」とあり、死後の世界としての極楽が示されている。また、それは常住永遠の世界としてではなく、妙喜世界さらには、兜率天宮へと再生していく一過程として示されているようである。このような冥界への再生は、7世紀頃の観貨邏においても広く信仰されていた。

中央アジアで行われたそのような習俗は、イランの古代宗教であるゾロアスター教から展開したものと考えるべきである。その特徴は偶像を多用するところにあった。元来、ゾロアスター教では偶像崇拜を禁止しているが、習俗化の中で多くの神格が具体的姿を獲得していった。その神々の中でもミトラ神は冥界の神として人々の信仰を集めていた。観貨邏における冥界への再生は、そのミトラ神信仰と密接に関連していた。そして、クシャーン朝におけるゾロアスター教も本質的には後世の観貨邏における習俗化したゾロアスター教と同じものであったと考えられる。

ゾロアスター教は善悪の峻厳な対峙を特徴とし、「最後の審判」において善の勝利と悪の破滅が説かれる。善悪の選択を誤った者には恐ろしい結末が

待ち受けているのである。しかし、このような一般的理解とは違って、クシャーン朝において信仰されたゾロアスター教には独自の展開があったことに留意しなければならない。伊藤義教博士によれば、ゾロアスター教は歴史的・教義的に以下の3段階に分けられる。

- 1) ゾロアスター教聖典『アヴェスター』中のガーサー（アヴェスター中でも古層に含まれる）に見られる創始者ザラスシュトラ自身の教説に基づくもの
- 2) 『アヴェスター』の残余部分（新層アヴェスターとも呼ばれ、ガーサーに比較して新しい文体で書かれる）に出るインド＝イラン共通時代の神々が復権する段階のもの
- 3) 中世ペルシャ語（パフラヴィー）文献に記述される教義、創始者の精神への復古

これを大きく1)と2)3)の二つに区別して、前者をザラスシュトラの教え、後者をゾロアスター教と呼ぶことができる。<sup>(15)</sup> 紀元1～2世紀頃のクシャーン朝におけるゾロアスター教を考える時、特に、2)の段階に注意する必要がある。以下、それぞれについて概観してみたい。

#### 1) ザラスシュトラの教え

世界は相反する根源的な二霊、スパンタ＝マンユ（聖霊）とアンラ＝マンユ（破壊霊）の闘争の中にあり、各人は自由意志でその両霊のいずれかを選択し、善と悪、光明と暗黒の戦いに身を投ずる。この善悪の戦いにおいて最高神アフラ＝マズダと信徒を助けるものとして、ザラスシュトラの死後、アムシャ＝スパンタ（不死者にして聖なるもの）と呼ばれる七神格（七陪神）が付加されていった。すなわち、スパンタ＝マンユ（聖霊）、ウォフ＝マナフ（善思）、アールマティ（随心）、アシャ（天則あるいは正義）、クシャスラ（王国）、ハルワタート（完全）、アムルタート（不滅）であり、この中のスパンタ＝マンユはアフラ＝マズダと同一視されることもあり、アフラ＝マズダ自身がその代わりとなる場合もあった。しかし、括弧内に示したように、七神格はいずれも抽象的概念であり、最高神アフラ＝マズダの徳目を具体化

させたものと考えられる。この点において、ザラスシュトラの教説はその当時のインド＝イラン共通の多神教崇拝からアフラ＝マズダを最高神とする倫理的ー神教に統合するものであったと言える。そして、その善悪の選択において個々人と神との間に契約が交わされると考えられた。その教義には強い終末論的色彩があり、「最後の審判」という形でユダヤ教をはじめとする後の契約宗教へ影響を与えていった。

2) 『アヴェスター』の残余部分、例えば「ヤシュト書」に見られるようなインド＝イラン共通時代の神々（ミスラ、アナーヒター等）がゾロアスター教のパンテオンの中に復活する。それは先にも述べたように、ザラスシュトラが排除した要素であった。二十一章からなる「ヤシュト書」は内容的にも変化に富んでおり、各章毎に対象となる神格が異なる上に古体ヤシュトとよばれる文体で記された諸章は、ヴェーダ文献との比較研究や、イランの前ゾロアスター的形態を探求するための重要な資料として注目されてきた。それらインド＝イラン共通の神々のなかでもミトラ神は最も信仰をあつめた神格であった。

3) 中世ペルシア語（パフラヴィー語）文献に記述されている教義である。紀元226年のアルダシール1世即位から651年の滅亡にわたるササン朝ペルシアにおいてはゾロアスター教が国教として信奉された。ササン朝の祖ササーンは「ヤシュト書」に登場するアナーヒター（灌漑と豊饒を司る女神）神殿の神官であった。このササン朝期に確立した二元論的教義ではアフラ＝マズダ（中世語形オフルマズド）はspanタ＝マンユと同一視され、直接アフリマン（アンラ＝マンユの中世語形）と対決する。この結果、両者をともに超越する根本原理としてズルバーン（時）を定立する。いわゆるズルバーン教が勢力を得ていった。

これらの3段階の中で2)のインド＝イラン共通の神々が復権する時代は、先に挙げたクシャーン期と重なる。「ヤシュト書」に現れる神々はアフラ＝マズダーを助ける者として示され、時としてそれにとって替わるほどの信仰を獲得していった。クシャーン朝のコインにギリシア、インド等の神々が取

り入れられ、宗教的に寛容な状況が現れた背景にはそのようなゾロアスター教のパンテオン化があったからだと考えられる。それらの神々の中でも特に優勢であったのがミトラ（ミスラ）神であった。「ヤシュト書」からミトラ神の特性をよく示している部分を引用すると、

ミフル＝ヤシュト第一節2

ミスラを欺く悪漢は、全ての国を破壊する、スピターマ（ザラスシュトラ）よ、

彼は百人の罪人と同じほどに義者を害する者なり。契約を破るべからず、スピターマよ、それが邪悪な者と結んだものであろうと、信仰を同じにする義者とのものであろうと破ってはならぬ、

なぜなら契約は不義者、義者のいずれのためにも存するのであるからだ。<sup>(16)</sup>

ここには善人であれ悪人であれ、ミトラ（ミスラ）神と契約を結ぶことによって加護を得られることが示されている。信仰を同じくすること、二心のない信心を捧げることが不義者・義者の相違を超えて要求されたのである。また、契約の権化であるミトラ神は全ての善悪を見通す力を持つと考えられた。亡者を審判するためにもミトラ神は人々の全ての行為を監視する能力を付与されている。そのためにミトラは千の眼、千の耳を持ち、さらに万の密偵を地上世界に遣わして人々を監視するという。

ミフル＝ヤシュト第二節7

ミスラ、広き牧場の主を我らは祭る、正しき言葉を語り、雄弁なる者、千の耳を有し、

見事なる姿の者、万の眼を持つ、丈高き者、遙けく見晴らす強き者、

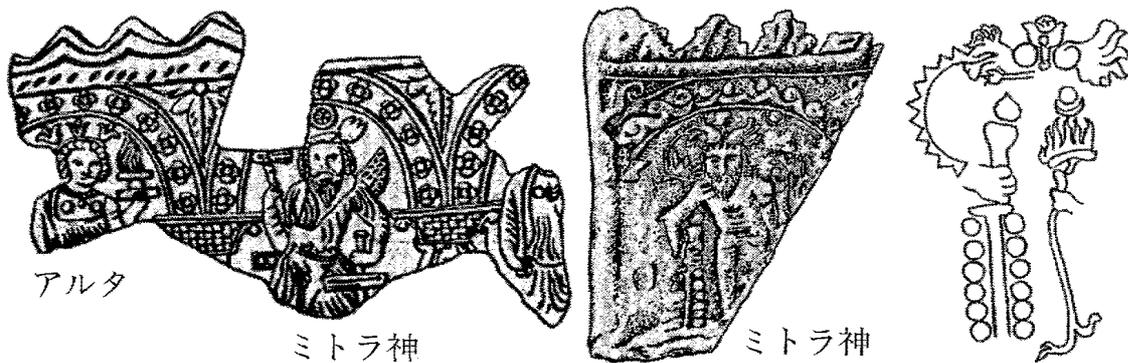
眠らざる者にして（常に）目覚めたる〔彼＝ミスラ〕を。<sup>(17)</sup>

また、ヴェンディグード中、ファルガルドには、

「ミトラは千の耳、千の眼、一万の監視人さえも持っている。彼は全てを見、全てを聞く。ミトラからは、地上であれ、地下であれ、水中であれ、空中であれ、何ものも隠れられない（隠れられない）。彼の監視人は、人々が行う悪も善も、全てを書きとめる（ファルガルド、5-24, 27）。」<sup>(18)</sup>

ミトラ神は人々の身・口・意の三つの行為に応じて、千の眼・千の耳・万の密偵を駆使するのである。それは阿弥陀仏の働きとして言及される、いわゆる見聞知「見てござる、聞いてござる、知ってござる」という特性とも符合する。

タジキスタンやウズベキスタンで出土するオスアリにはミトラ神が登場する。オスアリとはゾロアスター教に特有の土器製納骨容器である。ゾロアスター教の教義によれば、上述の七神格は物質世界にそれぞれ火、水、大地などの特定の庇護物を持っている。信徒たちはそれらの中でも特に火、水、大地の三要素を遺体で汚すことを避け、鳥葬・風葬を採用した。また、その遺骨も納骨容器に納め、納骨施設に安置した。



オスアリに描かれたミトラ神には、王座に坐り、剣や戦斧で武装した姿で描かれるものもある。軍神としてのミトラ神の特徴を示す例である。上図右のミトラ神は右手に十二の円光を具えた剣を携えている。ミトラ神は太陽とも関わりが深く、一年の中の十二の月々を支配する者と見なされていたのかもしれない。阿弥陀仏の特性である十二光、あるいは二十四願、三十六願、四十八願などの基数である十二の起源をミトラ神に求めることも可能なように思われる。

また、阿弥陀仏や極楽浄土に関連して、蓮華が重要な役割を果たすことはよく知られている。阿弥陀仏は蓮台上に結跏趺坐、あるいは立ち姿で描かれる。往生人も蓮台に迎えられ、蓮華は一旦閉じた後、極楽浄土の蓮池に生えて開花する。しかし、このような阿弥陀仏と蓮華の密接な関連については、

従来十分な検討がなされていない。この点でも大変興味深いのは、ミトラと蓮華の関連を示す資料が存在することである。<sup>(19)</sup>

## カレ＝コファルニホン遺跡調査

カレ＝コファルニホン都城址はタジキスタン南部、首都ドゥシャンベから南西に80km、エサンボイ村の北、コファルニホン川の東岸に位置する。前述の玄奘『大唐西域記』第一巻に出る親貨邏二十七ヶ国の中、八ヶ国<sup>(20)</sup>が現在のタジキスタン内に含まれる。その中の鞠和衍那国の都城の一つが、カレ＝コファルニホン都城址だと考えられる。

鞠和衍那国。東西二百餘里。南北三百餘里。国の大都城は周十余里なり。伽藍三ヶ所あり。僧徒百余人なり。

また、国境線をなしているコファルニホン川を渡り、ウズベキスタン側のポボトグ山脈を越えれば、スルハン川流域に入る。玄奘の伝える赤鄂衍那国である。

赤鄂衍那国。東西四百餘里。南北五百餘里。国の大都城は周十余里なり。伽藍五ヶ所あり。僧徒尠少なり。

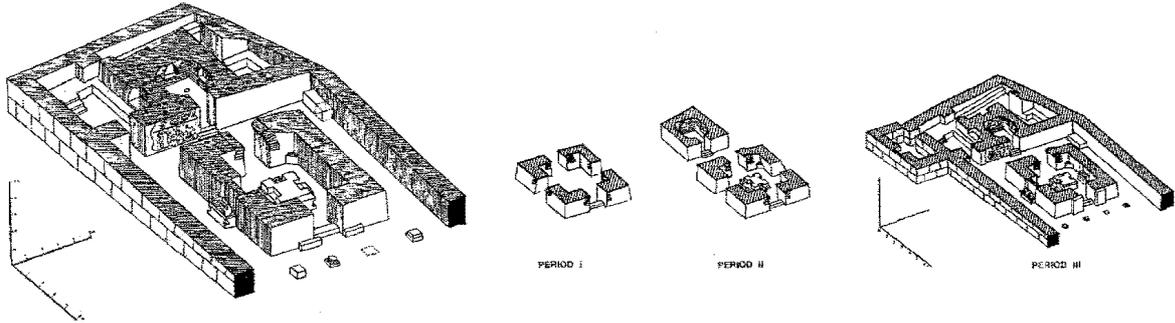
ここから川に沿って南下すれば咀蜜国（テルメズ）に入る。

咀蜜国。東西六百餘里。南北四百餘里。国の大都城周二十余里なり。東西に長く南北に狭し。伽藍十余ヶ所なり。僧徒千余人あり。諸々の牽堵波は即ち、旧に謂う所の浮圖なり。又た鑰婆と曰い、又た塔婆と曰う。又た私鑰簸と曰い、又た藪斗波と曰う。皆訛なり。及び仏の尊像多く神異靈鑿あり。

これらの記述より、この地域において仏教文化が栄えていたことが知られる。カレ＝コファルニホン都城址にも方形仏堂遺構があり、そこからは仏陀塑像と供養者たちを描いた壁画が出土している。この仏堂は1970年代にリトヴィンスキーによって発掘が実施され、調査の結果、三期にわたって段階的に建築されたことが報告されている。

それによれば、第一期、第二期が5世紀末から7世紀、第三期は7世紀初

頭から8世紀中頃で、最終的には仏教施設として機能していたとしている。しかし、第一期に建てられていたと考えられる回廊と四つの出入口を備えた方形の施設については、イランの拝火神殿（チャルタク）との類似も指摘されている。リトヴィンスキーによれば、そこにインドとイランの両要素の統合が表れているという。

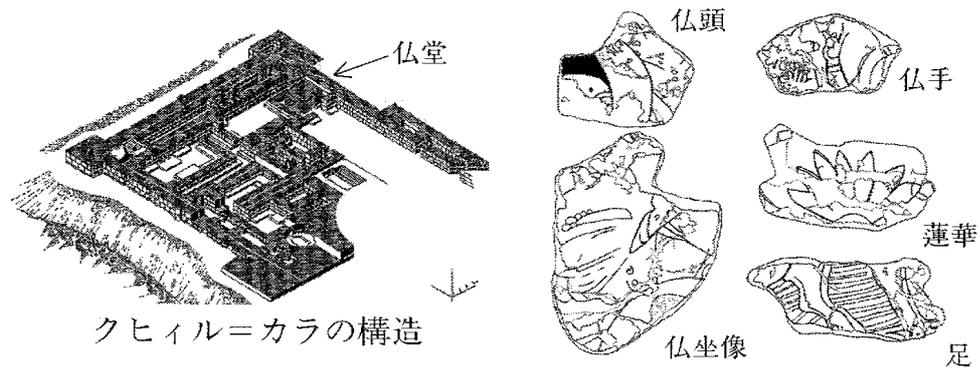


カレ=コファルニホン仏堂址立面図

仏堂 3期の変化

出土した仏陀塑像と供養者図については詳細な報告がなされているが、特に注目すべき点は、供養者図に描かれている人物である。出家者と在家者が共に仏陀に供養する様子が描かれている。それは都城内という世俗的空間の中に建てられた仏堂の特色をよく示している。出家者によって営まれた僧院に対して、大乘仏教的傾向を持っていたと考えられるのである。仏教文化学的観点から見れば、大乘仏教は仏教以外の宗教・思想との交渉の中で展開したものと言えよう。

都城内に仏堂が建てられた例として、さらにクヒール=カラ遺跡を挙げることができる。この都城址は首都ドシャンベから南へ110km、ヴァクシュ川流域にある最大の遺跡であり、1940～1980年代にかけて調査が実施された。この都城遺跡は、城壁に囲まれた小都市で、領主の住んだ内城（ツイタデリ）と一般住民の住んだ城壁内居住区（シャフリスタン）および城壁外の農民居住区（ラバド）の3部分から構成されている。仏堂は内城の南東に建てられ、3.4m四方で、回廊によって囲まれている。この仏堂からは壁画断片が出土しており、その中には仏頭、坐仏像、仏手、蓮華を描いたものが確認されている。



これら都城内に建てられた仏堂は初期浄土信仰の伝播を考える時、重要な意味を持つてくる。なぜなら、タクラマカン砂漠を経て中国へと続く西域南道にも方形仏堂が散在しているからである。ダンダン=ウイリク、カラドン、ニヤそしてエンデレにある仏堂遺構がそれである。堂の中心に壇を設置し、回廊を巡らせた方形仏堂は、世俗的空間の中に建てられている。その様式の一一致は両地域間の伝播を示すものである。

これらの西域南道の方形仏堂では、諸仏現前三昧が実践され、特に『般舟三昧経』に基づく初期浄土信仰が流布していた。回廊内壁に描かれた仏陀・菩薩たちの壁画は実際の修行に資するためのものである。蓮華台に坐した仏陀、蓮華台に立つ菩薩たちというモチーフはクヒール=カラなどの中央アジアの仏堂壁画と非常に類似している。紀元3～4世紀のニヤ遺跡方形仏堂からは蓮華を模った木製品が出土しており、蓮華に含まれて浄土に生ずるという蓮華化生を強く意識したものと考えられる。

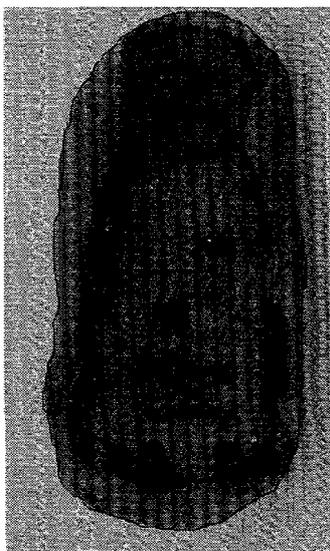
初期浄土信仰がミトラ神に起源するのであれば、イラン的傾向が現れるのも当然なことであろう。ミトラ神を祀る拝火神殿（チャルタク）が仏教文化と融合したことによって仏堂として転用されたとしても不思議ではない。また、蓮華が初期浄土信仰と如何にして結びついたのかという問題も、先に述べたミトラ神と蓮華の関係が反映したものと見ることも可能であろう。

以上、これまでのタジキスタンにおける都城遺跡の調査について紹介してきたが、次に、最新の発掘調査について述べてみたい。

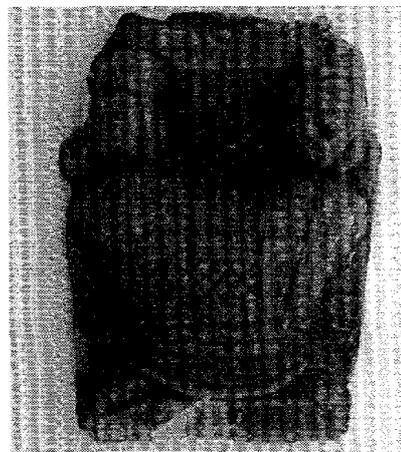
2007年9月に実施されたタジキスタン、カレ=コファルニホン遺跡発掘調査において、テラコッタ型とテラコッタが出土した。この発掘では、

KKF04 (X) と KKF08 (XI<sup>(2)</sup>) の 2 ヶ所を第二層の床面まで掘り下げた。第二層は 7～8 世紀の観貨邏期のものと考えられている。KKF04では、幅 70 cm の壁によって構成された工房址を確認した。KKF04 が工房址であることは、炉跡や作業台、さらには完型の土器壺と土器杯や土器灯明皿 (チラク) が出土したことで明らかである。

その遺構中、部屋 No. 4 (作業場跡) の炉跡の南、床面より 10～20 cm 上の位置でテラコッタを作るための型 (遺物番号: X-181) が発見された。肩間に描かれた白毫相 *ūrṇā* と二段に描かれた頂髻相 *uṣṇīṣa-śiraskatā* は三十二相中の二つで、仏陀像の特徴をよく示している。高さ 10 cm 前後の小さな遺物ではあるが、その仏教学的意義は大きい。カレ=コファルニホン遺跡はアジナ=テパ僧院のように出家者たちが住んだ特別なものではなく、一般の人々が世俗的生活を営んだ城郭遺跡である。そこには世俗の人々によって信仰された大乘仏教の性格を認めることができる。小さなテラコッタは一般の人々が入手し信仰の対象とするに相応しいものであった。高価で立派な塑像や壁画は一部の裕福な人々によって寄進され、寺院や僧院を荘厳した。それに対して、小さく安価なテラコッタ像は一般庶民により身近な仏像であった。工房址から出土したことから見て、この型によって多くのテラコッタが作られ、人々の信仰の対象となったことが推測される。



テラコッタ仏像型

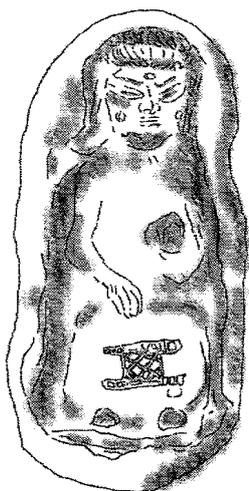


テラコッタ ミフル神像

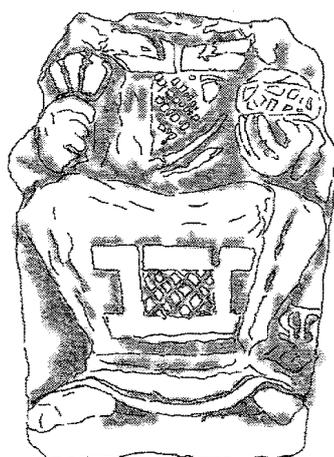
また、KKF08 (XI) の第二層から「神々の王の像」(遺物番号：XI-355)が発見された。発掘現場の北西隅，地表面から約240cmと深く，大きな甕のさらに下から出土している。これも9.0×5.0cmと小さな遺物である。頭部を欠くものの，細部はしっかりと描かれている。像は王座に坐っており，左手にはマジマル（小型の拝火壇）を持ち，右手には何かを握っている。胸部には格子状に楔帷子が描かれている。その姿はタジキスタン北部のアイニーン地区で発見されたミフル（ミトラ）木像と一致する。ミフル木像は5～6世紀頃のもので，観貨邏期のもと考えられている。裸形の木像ではあるが，衣服と甲冑を着せて奉納されていたものと考えられている。左の掌を上にしてマジマルを載せ，右手は先端が三つに分かれた聖杖を握っている。先端には山羊の頭が三つ模られ，三つの聖なる火（王の火，祭官の火，庶民の火）を象徴している。この木像との対照によって，神々の王像のテラコッタが右手に持った物は先端が三つに分かれた聖杖であると推測できる。このような王座に坐る神，あるいは武装した神としてのミフル神の例は多く，当時の人々に広く崇拝されていたことがわかる。

先の仏陀像型とミフル神像に共通する図柄として膝もとに描かれた拝火壇がある。ミフル神と拝火壇の組み合わせはよく見られるものであるが，仏陀像型に描かれた拝火壇は実に興味深いものである。仏陀は明らかに右手を拝火壇に差し伸べている。また，左手はマジマルを持っているようにも見える。拝火壇に手を差し伸べる姿勢はクシャーン朝あるいはササン朝の歴代王を描いたコインにも見ることができる。すなわち，この仏陀像型には仏教とゾロアスター教の融合が示されているのである。

これまでの資料の中にも仏教文化とゾロアスター教の出合いを示すものはあった。例えば，オスアリの蓋に施された故人の肖像に仏像の表現様式が見られる例である。中央アジア出土のオスアリには，故人の肖像を施したものが多数認められている。それは故人の霊魂が戻ってきた際に，生前の姿を見て喜ぶために作られたとい<sup>(22)</sup>う。そのような肖像の中に螺髪と白毫を備えたものがある。その肖像に，ゾロアスター教の埋葬儀礼と仏教文化の出合いを見



Matrix of terra kotta (Buddha)



Terrakotta (King of gods)



Y. Yakubov

ることができる。しかし、KKF04出土の仏像においては、仏陀自身が拝火壇に手を差し伸べている。それは出会いを超えて、仏教文化とゾロアスター教が融和した姿と見ることができる。このような現象はウズベキスタンのカラテパ遺跡にも見られ、火焰を伴った仏陀像の銘文に、ブッダ=オルムズドと書かれていたことも報告されている<sup>(23)</sup>。この地域において、ミフル神と最高神オルムズドは同一視されることが多く、いずれもゾロアスター教の重要な神である。以上のことを考え合わせてた時に、KKF04出土の仏像はミフル仏陀 (Mihur-Buddha)、さらには弥陀仏と呼ぶことも可能であろう。

## ま と め

観貨邏僧弥陀山をとおして、その出身地である中央アジアの仏教文化学的背景を考察してきた。それはクシャーン期からイスラーム化前までのゾロアスター教やその習俗として展開したミトラ信仰との交渉の歴史であったとも言える。ゾロアスター教徒が大乗仏教に転向した要因の一つに、ゾロアスター教の厳格な教義を挙げることがある。悪人は最後の審判において燃え盛る溶鉱炉に墮するしか道はない。そのような厳格な教義に対して、仏教は仏陀に帰依し、布施などの功德を積むことで救われると説く。交易で富を得た商人たちは仏教により所を求め、布施を行うことで救済を願ったというのであ

る。しかし、クシャーン朝のゾロアスター教はインド＝イラン共通の神々が復権を遂げた時期に相当する。それらの神々の中でも、先述のように、ミトラ神は善悪の仲介者であり、契約によって人々を救済すると考えられた。ミトラ神の信者たちはミトラ信仰と仏教を習合させることで、支障なく大乘仏教へ転向していったのである。

仏教では悟りを開けば誰でも仏になることができると説く。異教の神であっても成仏できるのである。自分たちの信奉する神がその独自の性格を保ったまま仏となった、そう考えることで人々は信仰を捨てることなく仏教に帰依することができたのであろう。

阿弥陀仏は悟りを開く前は法蔵菩薩と呼ばれていた。その法蔵菩薩はある国の王であり、師仏である世自在王仏に出会って王位を捨て悟りを求めることとなったとされている。法蔵菩薩の仏教帰依、そこに釈迦牟尼の生涯を重ねて見ているとも考えられるが、しかし、ある民衆の信仰を集めていた神の姿を象徴的に表現したものと見ることもできよう。カレ＝コファルニホン出土の拝火壇に手を差し伸べる仏陀像は、そのような仏教と異思想の融合を証明するものである。

## 註

- (1) 矢吹慶輝『マニ教と東洋の諸宗教』比較宗教学論選 (S. 63.78, 佼成出版社) pp. 246-247. 「パーリ語やサンスクリット語の新研究が完全に日本で着手されるようになったのは、極めて最近のことである。古い事実が今になってようやく判明してくる。もっとも阿弥陀という音訳は古い形であって、はたしてサンスクリット語の原音そのままかどうかははっきりしない。後には阿弥多婆 (Amitābha, 無量光) や阿弥多瘦 (Amitāyus, 無量寿) の音訳が伝わった。現存の梵本に出ているのは、このアミターバ・アミターユスであって、アミダではない。ここにまだ研究を要する問題が残されている。」
- (2) 拙稿「西城南道仏教の特徴について(2)」、『龍谷大学論集』, 464号, pp. 2-24, 平成16年 (2004)
- (3) 拙稿「阿弥陀と弥陀」『中央仏教学院紀要』第18号, pp. 35-51, 平成19年 (2007) 3月刊
- (4) B. Gharib, “Sogdian dictionary”, (1995, Tehran) の見出し語中, a- で始ま

る1,927語についてそれが曖昧音 ə- になる、あるいは消滅するものを抜き出してみると365語にも及ぶ。例えば、ミトラ神は、見出し語が 'myδr-y, ではあるが、(ə)miθr, miš, miši? (myšyy) と発音し、あるいは、→ myδr', miš- でも表記される。このような語の全体に対する比率を単純計算してみれば18.9%になる。実に2割ほどの語が先頭母音 -a がある場合とない場合で併用されていることになる。

- (5) 筆者は平成17年度より科学研究費助成金を受けて現地調査を実施してきた。研究題目は「中央アジア（タジキスタン）における仏教と異思想の交渉に関する調査・研究」（平成17～20年度基盤研究(B)課題番号17401023,）である。この調査・研究は次の本格的発掘・保存調査のための試掘段階である。
- (6) 中華電子佛典協会 (Chinese Electronic Text Association), 『電子大蔵経 (Chinese Electronic Tripitaka Series)』
- (7) トカラ要図, 桑山正進訳『大唐西域記』大乘仏典, 中国・日本篇, 第9巻, (中央公論社, 1987), p.15
- (8) 『大正新修大蔵経』第51巻 T. No. 2087, p. 872a-5
- (9) 『大正新修大蔵経』第55巻, 『開元釈教録』, T. No. 2154, 566b-27には寂友; 同じ内容で, 『大正新修大蔵経』, 第55巻, 『貞元新定釈教目録』 T. No. 2157, 867a4には淑友と記述されている。
- (10) 『大正新修大蔵経』第19巻 T. No. 1024, p.719b11
- (11) 『大正新修大蔵経』第19巻 T. No. 1024, p.718a, p.718c, p.720c
- (12)(13) 加藤九祚訳「中央アジア北部の仏教遺跡の研究」(シルクロード学研究, 第4巻, 1997) p.57, 同, p.58
- (14) 『大正新修大蔵経』第19巻 T. No. 1024, p.718b-05, 同, p.721b-13
- (15) 伊藤義教『アヴェスター』『ヴェーダ・アヴェスター』辻直四郎編, 世界古典文学全集3, (筑摩書房, 1967) p.418, 「ゾロアストラ教とは、言うまでもなく、ゾロアストラ（正しくは、ザラスシュトラ Zaratuštra) の教えが、歴史的に一つの体系にまとまったものをさして言うが、そうした体系にまとまるまでには、いろいろな要素が加わってきた。その要素のなかには、開祖のゾロアストラ自身が排斥した信仰形態までが見出だされるということから、そうした混成形態のものを Zoroastrianism 「ゾロアストラ教」とよび、これにたいして、ゾロアストラ自身の教義、いわば原初形態をさして Zarathushtrianism 「ザラスシュトラ教」とよぶ人もある。筆者は本邦で呼びなれた名「ゾロアストラ」をもっぱら用いる関係上、前者をゾロアストラ教、後者をゾロアストラの教義、ゾロアストラの教え、などとよんでおく。」
- (16) 岡田明憲『ゾロアスター教：神々への讃歌』(1982, 東京, 平河出版社), p. 182, 7-12

- (17) 同, p.185, 5-10
- (18) Y. ヤクボフ『古代ソグドの宗教』(1996, ドシャンベ) p. 97, 16-24
- (19) 同, pp.101, 7-15「大變興味深いのは、彫刻と一緒に発見された一枚の鏡に、ミトラの輝く光冠の像が、ミトラの足の下、突き出た岩の上に刻まれた蓮の姿で示されていることである。ササーン=クシャーン時代のコインのミトラ・蓮の像、それはレリーフに大勝利を、すなわちクシャーン朝国家に対する大勝利をもって描いたものと考えられることもできる。その場合、アルダシール(筆者註:アルデシール1世:位226-241)がクシャーン朝王国の征服者であり、「クシャーンの偉大な王」という称号を伴った彼の名においてメルヴの都市で最も早いササーン=クシャーン時代のコインが刻印されたことになる(ルコニン, 1977年, p.178)。」
- (20) 現タジキスタン内にあった国々は忽露摩国, 愉漫国, 鞠和衍那国, 鑊沙国, 珂咄羅国, 拘謎陀国, 尸棄国, 達摩悉鉄帝国の八ヶ国。引用文の鞠和衍那国, 赤鄂衍那国, 咀蜜国については, それぞれ『大正新修大蔵経』第51巻 T. No. 2087, p.872b-6, p.872a-26, p.872a-21に記述あり。
- (21) 略号 KKF はカレコファルニホン遺跡を, 04, 08の番号は地下レーダ調査時の連番を, また, タジキスタン編号の X, XI は過去にリトヴィンスキーが行った遺跡調査からの連番を示す。
- (22) Y. ヤクボフ『古代ソグドの宗教』(1996, ドシャンベ) P 110, 「ファルヴァルディン(祖霊祭月)におけるナヴルーズの祭日は幾らかの程度にファルハル(祖霊)の祭日である。なぜなら, ナヴルーズの日々にファルハルたちは彼らの親族の家を訪れるからである。彫像の施されたオスアリは, ファルハルたちが地上に戻り, その姿を見て喜ぶようにということで, ファルハルと関わっている。この日の間, 天からファルハルが降りてきて数日間地上に留まる。ファルハルは, 人々が, 彼らのために家や居住地や山々や国々に運んだ供物に喜び, 神々に人々の繁栄を願う。」
- (23) 同, pp.49-50, 「B. Y. Staviskiy は Karatepa の石窟寺院の壁面に「Buddha-Mazdo」と記銘され, 炎輪の中に描かれた仏陀の像を発見した。(Staviskiy, 1981, p.6)」, 同じく, 加藤九祚訳「中央アジア北部の仏教遺跡の研究」(シルクロード学研究, 第4巻, 1997) p.15, 「供養者の画面にはクシャンの流派の特徴が見えることをスタヴィスキーは指摘している。Dコンプレックスの洞窟内寺院の廊下には単色によるジャータカの光景, 全身が火炎でつまれた仏坐像が描かれていた。現地の人たちがこの画像を折衷的とみたことは『ブッダ=マズダ』を意味するクシャン文字の書かれていたことで知られる。」

キーワード 初期浄土信仰 阿弥陀仏 ゴロアスター教